上顎前歯部に発現した腺様歯源性腫瘍の1例

武富 晶子・杉本 忠雄・中村 貴司・津留 昭二
野村 俊夫・黒川 英雄・矢野 茂良・原田 薫*
児玉 高盛*・梶山 稔

A case of adenomatoid odontogenic tumor in the maxillary anterior region

Shouko TAKETOMI・Tadao SUGIMOTO・Takashi NAKAMURA
Shouji TSURU・Toshio NOMURA・Hideo KUROKAWA
Shigeyoshi YANO・Kaoru HARADA*・Takamori KODAMA*
Minoru KAJIYAMA

Key words: maxilla (上顎), odontogenic tumor (歯源性腫瘍), adenomatoid odontogenic tumor (腺様歯源性腫瘍)

緒 言

腺様歯源性腫瘍は、発現頻度の低いまれな腫瘍で、従来、腺(様)エナメル上皮腫と呼ばれていたが、1971年よりW.H.O.分類では、腺様歯源性腫瘍という名称で扱われるようになった^{1,2)}。

わたくしたちは、14歳、男児の上顎前歯部に発現した本腫瘍の1症例を経験したので報告する。

症 例

患 者: 14歳 男児。

初 診: 平成2年12月■日。

主 訴: 左側眼窩下部のび慢性腫脹。

家族歴・既往歴: 特記事項なし。

現病歴: 約3か月前より、左側眼窩下部から頬部にわたる腫脹と、軽度の自発痛を自覚したという。その後、腫脹がしだいに増大したため、某歯科医院を受診し、X線写真により嚢胞様陰影を指摘され、当科を受診した。

写真1 初診時オルソパントモグラム
(矢印は病巣部を示す)

現 症

口腔外所見: 顔貌は非対称で、左側眼窩下部を中心とした、び慢性腫脹を認める。

口腔内所見: 13残存、134未萌出、12~5歯肉唇移行部および口蓋側にび慢性的の腫脹がみられ、波動および羊皮紙様感を触知する。

X線写真所見: 134根尖相当部に、境界明瞭で類円形、クルミ大で、内部に歯牙様構造物を含む嚢胞様X線透過像が認められる(写真1)。

臨床診断: 13濾胞性歯嚢胞の疑い。

処置および経過: 全身麻酔下で、腫瘤を摘出したが、上顎洞は前上方へ圧排され、骨の一部は吸収し、洞炎が疑われたため、上顎洞根治手術も行った。

摘出物所見

肉眼的所見: 摘出腫瘍は、約40×26×24mm大、弾性軟で湿重量は15.8gであった。13の歯根は一部露出し

九州歯科大学口腔外科学第2講座
(主任: 梶山 稔教授)

* 新日鉄八幡製作所病院歯科口腔外科
(主任: 原田 薫科長)

Second Department of Oral Surgery, Kyushu Dental College (Chief: Prof. Minoru Kaji-yama)

* Department of Dentistry and Oral Surgery, Nippon Steel Corporation, Yahata Works Hospital (Chief: Kaoru Harada)

受付日: 平成4年3月17日

写真2 摘出物軟X線写真(矢印は石灰化物を示す)

写真3 病理組織像(H-E染色)

ていた。剖面では、黄白色透明な内容液を含む囊胞腔が認められ、なかに歯冠が含まれていた。

軟X線写真所見： [3] の歯冠を囲む腫瘍内部に、散在性の小石灰化物が認められた(写真2)。

組織所見： 外層は線維性結合組織の被膜よりなり、内部には囊胞腔がみられた。腫瘍組織は実質細胞に富み、円柱状細胞からなる腺管様構造や花冠状構造を認め、また、細胞間には好酸性の滴状物や、石灰化物を認めた。PAS染色、アルシアンブルー染色では、腺管腔の内膜状組織はいずれも陽性であった(写真3)。

組織診断： 腺様歯原性腫瘍。

考 察

本腫瘍の発現頻度はまれで、歯原性腫瘍の約2%とされている。著者らは、1971年から1990年までの20年間に本邦において腺様歯原性腫瘍あるいは腺(様)エナメル上皮腫として報告されたもの90例を集計調査した。

まず、発現年齢では10歳代が57例(63.3%)、20歳代19例(21.1%)、10歳未満7例(7.9%)で、10歳代から20歳代が76例(84.4%)となり、ほとんどが10歳代から20歳代に好発していた。平均年齢は18.6歳であり、この成績は諸家の報告と類似するものであった³⁾。性別では、一般に女性での多発が報告されているが、著者らの集計調査でも男性29例、女性61例で女性に多く、諸家の報告に類似するものであった³⁾。発生部位を類別にみると、一般には上顎前歯部での多発が報告されており、著者らの集計調査でも、類別では上顎53例(58.9%)下顎37例(41.1%)と上顎に多く、部位別にみると、上顎53例では前歯部38例(42.2%)、臼歯部15例(16.7%)となり、下顎37例では前歯部30例(33.3%)、臼歯部7例(7.8%)で、上下顎ともに前歯部で多発していた。

本腫瘍のX線所見では、多くの場合、埋伏歯を含んでいるため、濾胞性歯嚢胞を思わせる像を呈する場合が多い。また、過半数で点状性のX線不透過物が認められる。X線所見でX線不透過物がみられない場合でも、組織学的には石灰化物を認めることがある。その理由として、石灰化粒がきわめて少量か、あるいは石灰化度が低いかのいずれかであるといわれている⁴⁾。自験例でも、

パントモグラムでは点状性のX線不透過物はみられず、軟X線写真では多数認められ、組織検査ではさらに多くの小石灰化物が存在していた。

本腫瘍の病理組織学的特徴は、線維性組織で被包されており、内部に囊胞様腔のみられるものが多く、腫瘍組織は実質細胞に富み、そのなかには腺管様構造や、花冠状構造が認められる。腺管様構造は円柱状細胞からなり、その内腔部にPAS陽性の液体を含むことがある。間質には硝子様物や好酸性の滴状物、小石灰化物が散在性に認められる²⁾。自験例においても、腺管様構造や花冠状構造が認められ、腺管内腔部の膜状組織は、PAS染色、アルシアンブルー染色にて陽性反応を示した。

治療法は、摘出が主であるが、まれに開窓術の報告もみられる。本腫瘍は線維性の被膜で覆われており、容易に摘出可能で、再発の可能性はほとんどないとされているが、再発例も報告されている⁵⁾。自験例では、術後1年を経過した現在、再発傾向も少なく、経過は良好であるが、今後、定期的な経過観察を行う予定である。

結 語

14歳、男児の左側上顎前歯部に発現した腺様歯原性腫瘍の1例を経験したので、文献的な集計調査成績を加えて報告した。

引 用 文 献

- 1) Pindborg, J.J. and Kramer, I.R.H.: Histological Typing of Odontogenic Tumors, Jaw Cysts, and Allied Lesions. Geneva, World Health Organization, 1971, p 27-28.
- 2) 石川梧朗監修: 口腔病理学Ⅱ. 永末書店, 京都, 1982, 481-486頁.
- 3) 小木信美, 大辻 清, 他: 類象牙質の形成を伴った腺様歯原性腫瘍の1例. 日口外誌 35: 745-754 1989.
- 4) 池島 厚, 尾澤光久, 他: Adenomatoid Odontogenic Tumor の3症例について. 歯放 20: 52-60 1979.
- 5) 深谷昌義, 佐藤弘樹, 他: 上顎に発現した Adenameloblastoma の1例. 日口外誌 17: 155-158 1971.